

新購入主要文献解題

復刻版『キネマ・レコード』

牧野守監修

国書刊行会 2000年4月刊

日本における本格的な映画雑誌『キネマ・レコード』は、創刊号(1913年10月)から4号(1913年11月)までを『フィルム・レコード』と称し、それ以降を『キネマ・レコード』と称していた。発行元は、フィルム・レコード社、キネマ・レコード社、およびキネグラフィ社で、終刊は51号(1917年12月)である。本復刻版は、その全号を、第Ⅰ期として創刊号から30号までを、第Ⅱ期として31号から51号までを合冊として刊行したものである。

『キネマ・レコード』の特色は、第一に欧米映画および同映画界の紹介記事が豊富に掲載されていること、第7号からは表紙に毎号欧米の俳優(すべて女優)を載せていること、月2回の発行であることなど、のちに創刊される『キネマ旬報』の形式を思わせることである。第二に映画技術の紹介と啓蒙があることで、たとえばフィルムの着色の工夫については、イギリスのアーバン社のそれが紹介されてもいる。第三は東京と横浜で封切られた外国映画をリスト化していることで、映画ファンにとっては今も昔も変わらぬ上映記録への熱い視線をうかがうことができる。第四は日本映画界への提言が数多く記されていることで、それによってわが国初期の「映画」状況が手に取るようにわかることなどである。

この『キネマ・レコード』発刊の時期は、ちょうどイタリア映画の隆盛期と重なっていることもあって、『タオ・ヴァデス』をはじめとするイタリア映画の紹介が充実している。ついで第10号(1914年4月)の「ドイツ映画」の特集、第41号(1916年11月)の全誌面をつかった「アメリカ号」など、映画史はもとより、文化史のうえでも重要な記事であふれている。これによって人文学研究所は、さきに購入した『活動写真雑誌』

『活動評論』の復刻版をもあわせて、表象文化研究の手がかりを得たことになろう。

(日高昭二)